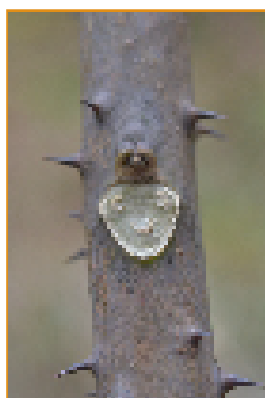


～ 冬の森の見どころ ～

冬芽と葉痕を観察してみよう



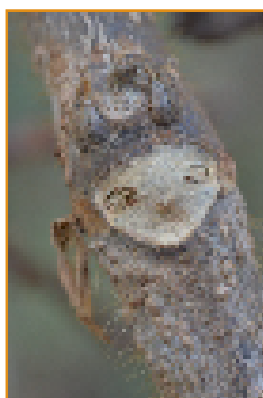
アジサイ



カラスザンショウ



ネムノキ



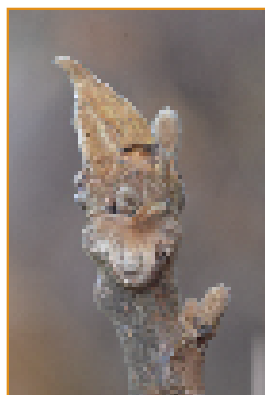
クズ



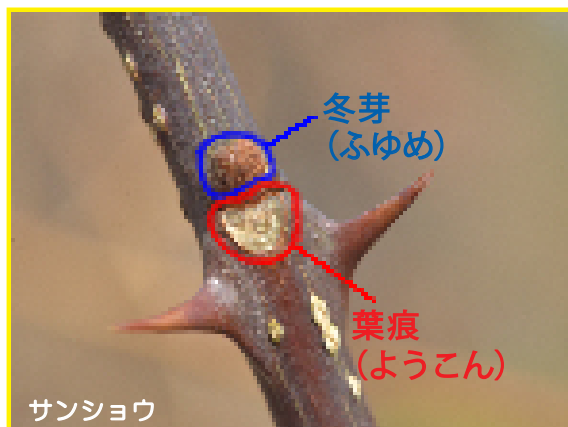
ヤブデマリ



ニワトコ



オニグルミ



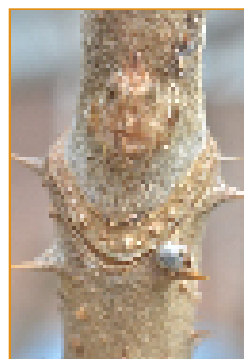
サンショウ

葉が自然に落ちると、木には葉がついていた痕（あと）が残ります。これが**葉痕**になります。根から吸い上げた水分や葉で出来た養分などを運ぶためのくだ（維管束）の痕が独特の模様になっています。葉痕の近くには**冬芽**があり、ウロコのような芽鱗（がりん）やフサフサの毛に包まれています。この**葉痕**や**冬芽**の形や模様などから植物の種類を調べる事が出来ます。

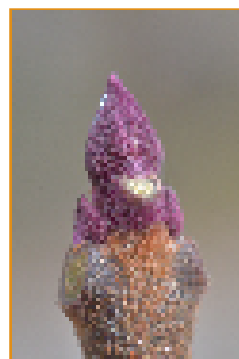
冬から早春にかけての森は木々の葉が落ち、下草も茂っていないため、いつもより林内を遠くまで見渡すことが出来ます。そのため、野鳥観察にはこの時期が最適で小型のエナガ、シジュウカラ仲間や、この辺では冬にだけ出会うことができるアトリ、マヒワなどを見ることが出来ます。いろいろな種類の鳥が群れとなった混群に出会うことも多いので、これから野鳥観察を始めようとする人にはお勧めの季節になります。

森の中に緑が消え、一見植物観察の見どころがないような季節に思われますが、目を凝らして観察を続けているといろいろな形をした冬芽に気づくはず。厳しい冬を乗り切るために冬芽は、硬いウロコのような芽鱗や、いか

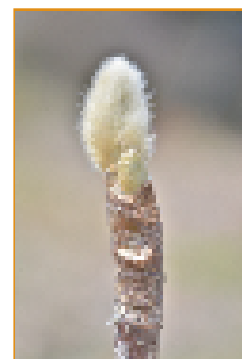
にも暖かそうな毛で芽を包んでいます。今回冬芽の写真を撮りに行ってきたことなのですが、クサギの冬芽が鮮やかな赤紫色であったのには驚きました。モクレンの純白の毛は見るからにふわふわしていて触りたくありません。また、冬芽をよく観察していると奇妙な模様に気づくはず。冬芽の近くに、見方によっては何かの顔のような、いろいろな表情をした小人たちです。これは葉っぱが落ちた後の葉痕というもので、木の種類ごとに模様が違います。特にクズのつるにある葉痕は表情豊かで印象的でした。1本木を選び、じっくり葉痕観察しながら、小人の表情を比べるというのもなかなか面白い冬の自然観察になるような気がします。（文、佐々木 写真、篠木）



タラノキ



クサギ



モクレン

森のくまさんは？

クマ剥ぎは、重大な林業被害で、伐期を迎えた大径木の皮を剥ぎ、木質部を腐らせ、材の価値を著しく損ねたり、枯らしたりしています。林業被害については、別の機会に紹介します。ここでは、クマ剥ぎなどのクマの生態のみを解説します。



← クマ剥ぎ

越冬を終えたクマが早春に針葉樹の皮を剥いで、形成層を前歯でしごき取って食べる行為で、詳しく解明されてない行動です。文献には、スギ・ヒノキ・モミ・マツなどとされていますが、あきる野ではスギだけで行われているのが特徴だと言えます。成獣では、150cmくらいの高さまで歯型が見られます。これは、ツキノワグマが立ち上がった高さで、このことから個体の大きさが想像できます。



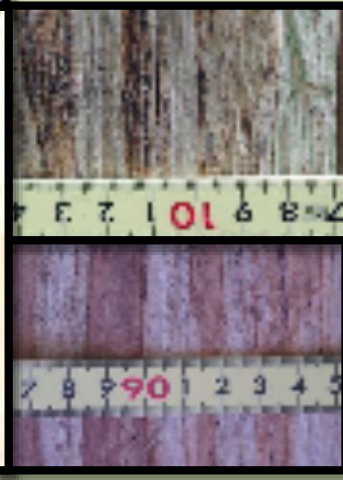
4年前

3年前



↑ 爪痕

スギの外皮を剥ぐときにできた爪痕



← 歯型

前歯2本で形成層を削り取った跡。

上の写真では1cm幅、

下の写真では1.4cm幅で、クマの大きさの違いが推察できます。

※あきる野には3本の歯型がつく個体があります。

← 重複するクマ剥ぎ

1本の木に2か所以上のクマハギが見られるケースが見られます。この写真では大きなクマ剥ぎが4年前、小さなクマ剥ぎが3年前のものでした。

クマ剥ぎは、母グマが子育ての時に小グマに教えると言われていいます。そこで、このクマ剥ぎでは、左の4年前のクマ剥ぎは高さも十分にあることから、母グマが子グマにクマ剥ぎを教えながら行ったものだと思います。この写真では分かりませんが、大きな歯型と小さな歯型が確認できたクマ剥ぎで、親子グマのクマ剥ぎでした。

右の3年前のクマ剥ぎは、高さが低いことから、小ぶりのクマのものだと思われます。

このことから、4年前に母グマからこの木でクマ剥ぎを教わり、翌年に独り立ちした若いクマが、同じ木で母グマに教わったクマ剥ぎをしたのではないかと私は勝手に想像しています。

あきる野の森で、ツキノワグマは子育てをして独り立ちした小グマが存在していることで、確実にクマの生息頭数は増えています。

何頭のクマなら餌に困らないか分かりませんが、ツキノワグマが人里に出たり、人身に被害が及ぶことなく、林業被害の拡大も少なく、森の中で静かに暮らしていける環境や頭数を把握できればと考えて調査を続けています。(杉野)